

江口忍の

マイ・
オピニオン

MY OPINION



— 第4回 —

愛知県の 公立高校入試制度改革

共立総合研究所
副社長・名古屋オフィス代表

江口 忍

1 はじめに

最近では「15の春を泣かせない」という言葉をあまり耳にしなくなりましたが、今も昔も子ども達にとって高校入試は人生における大きな試練の一つです。

さて、私は愛知県の大村知事が今年度から立ち上げた教育懇談会で同県の公立高校入試制度改革についての議論に参加しています。高校入試制度は受験生や保護者はもとより一般の関心も大変高く、見直すとすれば大きな影響が出ることとなります。私はこの数ヶ月間、地域経済の調査・分析という本業の手を休めて、学校関係者をはじめ多くの方にご意見を伺いながら、「これからの愛知県にはどのような高校入試制度がふさわしいか」を考えてきました。今回のマイ・オピニオンは、このテーマを取り上げたいと思います。

2 愛知県独自の「複合選抜制度」

愛知県の公立高校入試は「複合選抜」という独自の制度で行われています。この制度の仕組みはかなり複雑です。愛知県は「尾張学区」と「三河学区」の2つの学区に分かれています。そして普通科の場合、各学区の高校を1群と2群に分け、さらにそれぞれの群の高校をAグループとBグループに分けます。つまり、**図表1**に示すように、尾張学区と三河学区の高校は1群Aグループ、1群Bグループ、2群Aグループ、2群Bグループの4つに分かれることとなります（各群にはAB両グループの共通校もあります）。専門学科の場合は群分けがなく、AとBの2グループに分かれます。それぞれの群・グループには優劣の関係はありません。AグループとBグループの入試は3日間ずらして行われます（群に関係なく同一グループは同一の試験日）。

受験生は自分が住む学区で1群、2群のどちらを受験するかを選びます。そして、そこで選んだ群のAグループから1校、Bグループから1校を志望校に選び、一方を第1志望、他方を第2志望に決めます。第1志望を1校だけ受験することも可能ですが、合否判定では単独志望かどうかや志望順位による有利・不利はありません。合格発表は両グループ一斉

に行われ、「第1志望に合格」、「第2志望に合格(第1志望は不合格)」、「両校ともに不合格」のいずれかが判明します。

複合選抜制度の大きな問題点は、第1志望は好きな高校を選べるが、第2志望は限られた高校(普通科では全体の約4分の1)からしか選べないという点です。一つ例を挙げてみましょう。知多半島ナンバーワンの進学校である半田(半田市)を第1志望にするとします。半田は尾張1群に属します。知多半島で半田に続く進学校は横須賀(東海市)ですが、横須賀は尾張2群なので第2志望にはできません。このため遠距離通学を避けたいならば半田とは難易度に

かなりの開きがある半田東を選ばざるを得ません。同じように第1志望の近くに第2志望にふさわしい難易度の高校があっても、そのような併願ができないケースがかなりあります(例:一宮と一宮西、岡崎と岡崎北、時習館と豊橋東など)。受験生や保護者に話を伺いますと、複合選抜制度については複数回受験できる点は好評のようですが、第2志望の選択肢が少ないことに対しては改善を望む声が多く聞かれます。

こうした問題点がある反面、複合選抜制度は「進学校の地域分散」という点では大きな効果を上げています。かつての学校群制度時代(76年~91年卒業)には、愛知県内

図表1 学区・群・グループ別高校難易度ランキング(普通科)

目標 偏差値	尾張1群		尾張2群	
	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ
63	旭丘			
62				
61				
60			明和・一宮	
59				
58		菊里		
57			向陽	
56		半田		千種
55		一宮西		瑞陵
54				桜台
53				
52	名東			西春・五条・一宮興道
51	昭和			旭野・横須賀
50				
49				
48			春日井・高蔵寺	
47		天白	名古屋南・新川	
46	江南	小牧南	松蔭	
45	一宮南	名古屋西		
44	津島・半田東		津島	
43			東海南	
42		中村	長久手	春日井南
41	熱田		大府	
40	緑・日進西			
39	豊明	丹羽	瀬戸西	北・津島東
38		尾北・東郷		大府東
37		春日井東		春日井東
36	常滑	阿久比・木曾川	常滑	阿久比・木曾川
35	小牧	富田	津島北	
34				美和
33	一宮北	鳴海	一宮北	
32	海翔		山田・海翔	
31				瀬戸
30	惟信	東浦	稲沢東・春日井西	東浦
ランクなし	尾西・犬山南・内海	武豊・日進・犬山	尾西・内海	武豊・守山・犬山

目標 偏差値	三河1群		三河2群	
	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ
63				
62				
61	岡崎			
60				
59			刈谷	時習館
58				
57				
56				
55		豊田西		
54				
53	豊橋東			
52				岡崎北
51				西尾
50			豊丘・国府	
49		刈谷北		知立東
48	豊田北			安城東
47				
46	成章	豊橋南	成章	
45	豊田南		岡崎西	
44			安城	小坂井
43				
42			西尾東	
41				
40	新城東		新城東	
39				
38		豊田・蒲郡東		蒲郡東
37		豊野		
36				
35	豊橋西		豊橋西	碧南
34	一色	吉良	知立・一色	吉良
33				安城南
32				
31	御津	幸田	御津	幸田
30	衣衣	福江		福江
ランクなし	岩津・足助・田口	加茂丘・松平・三好	高浜・足助・田口	加茂丘

(注) 青字はA群・B群共通校。

出所:佐鳴予備校ホームページ http://www.sanaru-net.com/junior_high/exam/aichi/index.html

愛知県の 公立高校入試制度改革

の公立高校で毎年安定して東大に10人以上合格者を出していたのは千種、旭丘、岡崎の3校でした。ところが現在こうした高校は旭丘、岡崎、一宮、時習館、刈谷の5校に増えています。東大へ2ヶタ合格する公立高校が1県に5校もあるのは全国で愛知県だけです。これらの5校は尾張学区が2校、三河学区が3校で、名古屋市内は旭丘1校だけです。このような進学校が県内に分散していることは、県内のどこに住んでいても努力次第で難関大学に進学できる道があるわけですから大変望ましいことです。

このように愛知県の複合選抜制度は、第1志望については選択の自由を保証しながら特定校への過度な人気集中を招かないようにし、結果的に進学校の分散を図った点でとても上手く工夫された制度といえるでしょう。

3 入試の公平性に欠ける「内申点」

複合選抜制度とともに愛知県の公立高校入試制度のもう一つの特徴といわれているのが、合否判定における「内申点重視」です。愛知県では当日点が100点満点(1教科20点×5教科)、内申点が90点満点(中3時点の5段階×9教科×2)で、当日点と内申点の比率は10:9が基本です。そしてここから当日点を1.5倍するパターン(当日点:内申=15:9=5:3)と、内申点を1.5倍するパターン(当日点:内申=10:13.5)の計3通りの中から各高校がいずれか1つを選択します。現在は進学校の大半が当日点重視のパターン(5:3)を選択していますが、それでも当日点と内申点の合計の4割近くを内申点が占めます。隣の岐阜県の場合、当日点と内申点の比率は7:3~3:7の間で各校が選択でき、進学校はほとんどが7:3(つまり内申点のウエイトは3割)を選択しています。ですからこれに比べると確かに愛知県は内申点重視のように見えます。しかし全国の入試制度を調べますと、ほぼ約半数の都道府県が6:4~4:6の範囲ですので愛知県が特に内申点重視ということはありません。

しかし、受験生や保護者の話を伺いますと、内申点に対しては確かにさまざまな不満をお持ちのようです。それは内申点の公平性に疑問を持たれているからです。現在の内

申点は5段階の絶対評価で評点が付けられています。かつての内申点は5と1の割合がそれぞれ7%、4と2が24%、3が38%となるように評点が付けられる相対評価でしたが、絶対評価ではテストの点だけでなく、日頃の授業に取り組む姿勢や提出物を出しているかどうか、ノートをきちんと書いているかなど、生徒自身の学習活動全体が総合的に評価されます。絶対評価はテストの点には表れない子どもの努力が評価されるのは良い点だと思います。ですが相対評価に比べると先生の裁量が広がることから、子ども達が内申点を意識して、先生に対して過度に従順になってしまうこともあるようです。

また、ある私立高校の先生からは、実際の受験生のデータを見ると、内申点は「中学校の学力レベル差」(≒いわゆる文教地区かどうかといった地域差)と「学校毎の評価方法の差」(中学校毎の評価の甘い・辛い)の差が大変大きく、内申点重視の入試は公平性を損なう面があるという意見をいただきました(私立高校の入試では内申書は参考程度にしかされないようです)。

4 入試制度改革の方向性 ～「経済屋」の立場からの視点～

ここまでは愛知県の公立高校入試制度の特徴を見てきましたが、ここからは今回の入試制度改革について私の考えを述べてまいりたいと思います。私は今回の入試制度改革について以下に挙げる5つの方向性を考えています。

①自分が輝ける学校を母校に

複数の受験機会は維持しながら第2志望についても幅広い学校選択をできるようにして、不本意入学や帰属意識の低い生徒を減らします。それにより、これまで第2志望入学者の多かった高校で入学者の志望意欲を引き上げるとともに、各高校が特色を強く打ち出すことで、大学進学実績以外の要素でも評価される“生徒自身が輝ける学校”づくりを進めます。

②互いが伸び合い、高めあう中学生生活を

中学校において「自ら考え、発言し、行動できる」環境を作ることで、自己の確立に大切な時期である中学時代を

内申点のために先生や周囲の顔色を窺う「もの言わぬ中学生」を生まないようにします。

③選抜制度としての公平性に対する信頼向上

内申点での評価に一定の意義があることは認めますものの、中学毎に学力レベルや評価の仕方の違いが大きい内申点を合否判定にあたって高いウエイトで評価することは入試で重要な「公平性」を損なう面が否定できません。このため合否判定における内申点のウエイトは引き下げる(または学校間の評価のバラツキを調整する)方向で考えます。

④全国や世界から教育環境で選ばれる愛知に

愛知県の大村知事が掲げる「世界と闘える愛知」を目指すには全国・世界から優れた人材を集めるために、そうした人材が自身の子女にふさわしいと認める教育環境を構築しなければなりません。具体的には、大都市には欠かせない「教育インフラ」として、関東、関西に負けない「スーパー進学校」を作る必要があると考えます。

⑤県内のどこに住んでも一定の大学進学環境を提供

複合選抜制度の導入を契機として、愛知県内では尾張学区を中心に名古屋市から郡部へ進学校の分散が図られました。その陰で名古屋市南西部から旧海部郡南部・西部や津島市にかけて大きな「進学校空白域」ができました。同じ愛知県なら県内のどこに住んでいても遠距離通学を強いられず難関大学への進学を目指せるような大学進学環境が望まれます。このため、こうした進学校空白域では大学進学に特に力を入れる「進学重点校」を指定するなどの対応を考える必要があると思います。

以上の中で④と⑤については、私が地域経済の調査分析を本業としていることから出てきた視点だと思います。教育の専門家の方からすれば、飛び抜けた進学校を作ることには受験競争を煽り、学校間の格差拡大につながるためにきつと抵抗感が強いでしょう。私自身も決して学校の序列化を進めたいという意図があるわけではありません。ただし学校は

入試という“選抜”を行う限り、必ず序列化が生まれます。現在の複合選抜制度でも図表1のように学校の序列はあります。

④に関連して私が愛知県に「スーパー進学校」が必要と考えるのは、いわゆる“クリエイティブ・クラス”^(注1)といわれる社会階層の中に、教育環境を理由に愛知県に住むことをためらう人が少なくないからです。例えば大企業の在名支店・支社の管理職は、子どもが中学生以上の場合ほとんどが単身赴任をします。これは、彼らが自分の子どもを通わせたいと思う中学・高校が愛知県にないからです。また愛知県に本社を置く有力企業のトップにも、子どもを東京の私立中学や高校に通わせている方が何人もいらっしゃいます。愛知県にも旭丘、岡崎、東海といった全国レベルの進学校があります。ただ、これらの高校の今春の東大合格者数は旭丘32名(全国16位)、岡崎27名(23位)、東海26名(24位)で、全国トップの開成(203人)、2位の灘(98人)、3位の麻布(90人)、4位の筑波大附属駒場(83人)などに比べると大きな差があります。愛知県出身の私には旭丘も岡崎も東海も十分すぎるほど立派な進学校に見えますし、そもそも東大合格者数だけで進学校としての評価を下すのは乱暴かもしれませんが、東大に50名以上合格する高校がいくつもある東京の人からは、「愛知にはまともな学校がない」と思われてしまうのです。こうした認識を変えるには、東大合格者数が全国5指に入るくらいの進学校を愛知県に作るほかありません。スーパー進学校は「本格的な国際空港」や「高度な医療機関」などと同列の「大都市に欠かせないインフラ」として必要なものです。愛知県や名古屋市が厳しい大都市圏間の競争に勝ち抜くには、教育的な是非論は別にして、飛び抜けた進学校を作ることは避けて通れないことだと思います。

また⑤については、以前このコーナーで名古屋市内の高校の東西格差を取り上げたことがあります。当社のホームページ(http://www.okb-kri.jp/_userdata/pdf/report/145-6.pdf)に全文を掲載しておりますので詳しくはそちらをご覧くださいと思いますが、私が心配しているのは、学校群制度から複合選抜制度に変わってから、名古屋市の南西部から旧海部郡南部・西部や津島市にかけての地域から進学校がすっかり消えてしまったことです。

愛知県の 公立高校入試制度改革

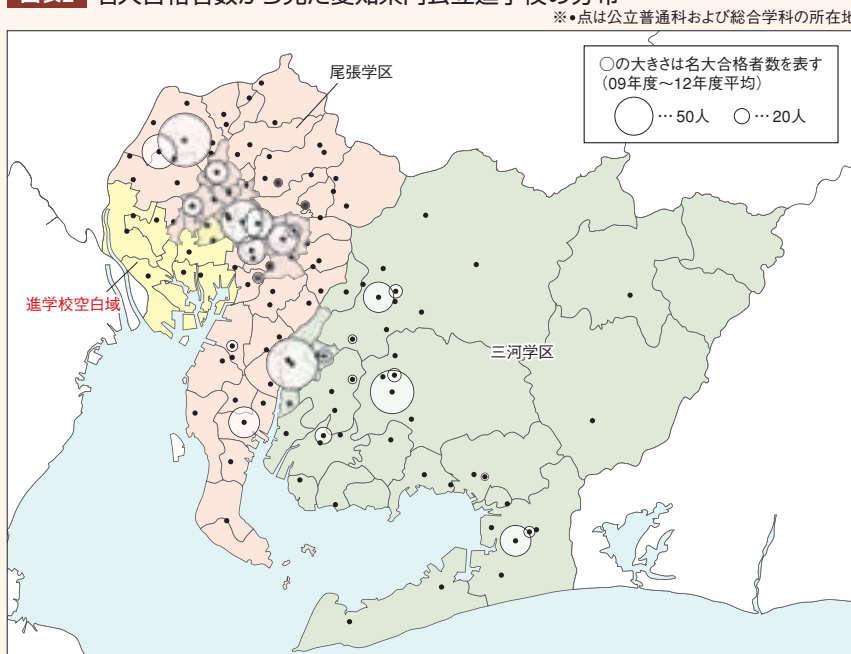
図表2は今春の県内公立高校の名大合格者数を地図上に表したのですが、黄色で示した「進学校空白域」（名古屋市中村区、中川区、港区、飛島村、蟹江町、弥富市、津島市、愛西市）にはまとまった数の名大合格者を出す高校が全くないことがわかります。図表3を見ると、学校群時代に

は進学校空白域の高校（普通科・総合学科で9校）から毎年70~80人の名大合格者がありました。最近では1ヶ所にまで落ち込んでいます（今春は9人）。愛知県には普通科と総合学科の公立高校が120校あり、ここから今春898人が名大に合格しています。平均すると1校から7.5人が合格している計算ですので、進学校空白域の「9校で9人」というのは非常に少ない数です。

私が教育環境の地域格差を特に気にするのは、教育環境（言い換えますと進学校の有無）というのは地域の盛衰に深く関係するからです。進学校があるとその近くへの転入が増えます。逆に進学校がない地域からは、よりよい教育環境を求めて人が転出していきます。名古屋市の区間転入出データを見ますと、中村区、中川区、港区などの南西部から進学校の多い東部へ引っ越すという人の流れが恒常的にあることがわかります。こうした人の移動のすべてを教育環境だけで説明できるわけではありませんが、「進学校がない」ということで、（教育に対する意識の高い層を中心に）人が出ていく→地元の小中学校の教育環境が悪くなる→地元の高校のレベルが低下する→ますます人が流出する、という悪循環を生み、こうした悪循環が犯罪の増加など教育以外の面にも悪影響を与えていくことになるのです。地域の盛衰を分析する立場からは、地域の衰退につながる「進学校空白域」は速やかに解消する必要があると思います。

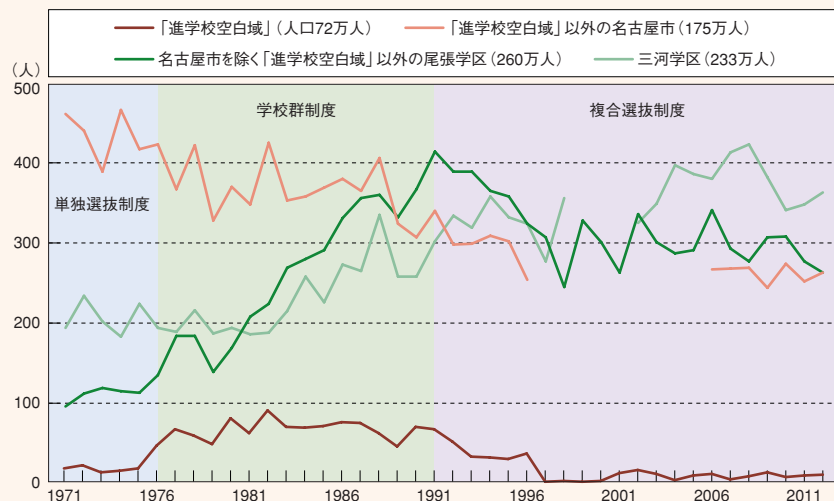
ただし、この問題を入試制度を変えることで修正しようとする、入試に合格しても行きたい学校へ必ずしも行くことができなかった学校群制度のように、他に弊害が出てくる恐れがあります。ですから進学校空白域の問題は入試制度とは切り離して議論した方がよいでしょう。

図表2 名大合格者数から見た愛知県内公立進学校の分布



出所:毎日新聞社「サンデー毎日」をもとに共立総合研究所にて作成

図表3 高校の所在エリア別名大合格者数の変化(公立のみ)



(注)「進学校空白域」:名古屋市中村区、中川区、港区、津島市、愛西市、蟹江町、弥富市、飛島村
90年代後半から2000年代にかけて一部進学校のデータが欠落しているためグラフが途切れているところがある。
出所:毎日新聞社「サンデー毎日」をもとに共立総合研究所にて作成

5 論点は「複合選抜制度」と「内申点の取り扱い」 愛知県公立高校入試制度の改革「私案」

ここまでに見てきたことを整理しますと、今回の入試制度改革に論点は「複合選抜制度」と「内申点の取り扱い」の2点に絞られます。図表4ではこの2つの論点について現在の複合選抜制度に対するプラス面・マイナス面の評価についてまとめてみました。

そして以上を踏まえた上で、図表5に私が考える愛知県公立高校入試制度の改革「私案」をお示ししたいと思います。一言でいいますと、現在の国公立大学の入試制度に近いものを考えています。

まず、受験機会については、前期、後期の一般入試機会を設け、現在の2回を維持します。そして学区・群・グループ分けを全廃し、県内全ての公立高校の中から受験校を自由に選べるようにします。群・グループだけでなく尾張、三河の学区区分まで廃止すべきと考えますのは、このように別学区になっていることが、同じ県でありながら尾張と三河の間に「見えない壁」を作り出しているように思われてならないからです。以前なら尾張と三河が同一学区になると、学力の高い生徒が三河から名古屋市内の人気校へ流出し、

尾張と三河の学校格差が広がってしまったかもしれません。しかし現在は三河にも岡崎高校や刈谷高校など極めて優秀な高校が揃っていますので、むしろ名古屋市内から三河の高校に進学を希望する生徒が出てくることも十分考えられます。学区・群・グループを全廃すれば難易度による学校の序列は今以上に明確になるでしょうが、既に述べたように、どのような入試制度にしても学校の序列化は避けられないことですし、高校が学力以外の面で特色を持つことで序列化の弊害は軽減されるだろうと思います。

また、前期と後期の募集人員については、一定の範囲（例えば9:1～1:9）の間で各高校が自由に決められるようにします。そして、当日点と内申点の比率については、前期は完全に各校の裁量に委ねて、10:0、つまり内申点を全く考慮しないことも可能とします。10:0という極端すぎるように見えますが、栃木県や群馬県では9:1という例もあります（両県とも高校毎に比率は異なります）。ただし、当日点重視の高校があまりに増えてしまうと、中学校では授業態度が悪くなる、提出物を出さない、副教科の授業を軽視するといった弊害が起こる恐れも否定できません。ですから、そうしたことにはならないよう、後期募集については全ての高校に前

図表4 高校入試制度改革の2つの論点

		複合選抜制度	内申点の取り扱い
現行制度に対する評価	現行制度の概要	<ul style="list-style-type: none"> 尾張学区と三河学区の高校をそれぞれ1群、2群に分け、さらに各群をAグループ、Bグループに2分することで各学区の高校を4つに分割（一部両グループの共通校あり）。第2志望は第1志望と同一群の別グループからしか選択できない。合格発表は両グループ同時に実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 当日点100点満点（各20点×5教科）に対して内申点90点満点（5段階×9教科×2）を基本に、ここから当日点を1.5倍、または内申点を1.5倍する計3パターンの中から各高校が一つを選択。ただし「当日点重視型」でも当日点150点・内申点90点（総得点に占める内申点ウエイト37.5%）と、合否判定で内申点が相当大きなウエイトを占める。
	プラス面	<ul style="list-style-type: none"> 学校群時代と違い、合格すれば第1志望の高校へ確実に入学できる。 一般入試の受験機会が2回ある点は生徒や保護者から総じて高評価。 それぞれの群・グループ内で学校の序列化はあるが、トップ進学校が分散することで名古屋市内と尾張郡部や三河地方との学校格差はかなり小さい。 	<ul style="list-style-type: none"> 内申点のウエイトを高くすることで中学での平素の努力を評価できる（特に入試科目にない副教科）。 内申点が入試での「持ち点」になるため、業者テストに全面的に頼ることなく中学での進路指導が可能。 内申点が生徒に対する“抑え”となることで、中学校の円滑な学校運営・授業運営にはプラス。
	マイナス面	<ul style="list-style-type: none"> 第1志望は自由に選べるものの、第2志望の選択肢が普通科全体の約4分の1に狭まるため行きたい学校を見つけにくい。その結果第2志望では不本意入学や遠距離通学が増加。 学力は高いものの志望意欲の劣る第2志望受験生が、学力は劣るものの志望意欲の高い第1志望受験生を押しつけて合格する「玉突き現象」が発生。 	<ul style="list-style-type: none"> いわゆる「内申点稼ぎ」のために中学校生活が窮屈になる土壌を生んでいる（「もの言わぬ中学生」の増加につながっているとの指摘）。 中学毎に学力レベル差（≒地域差）や評点の付け方（＝5段階の分布）の差が大きいため、受験生や保護者に不公平感がある。

出所：共立総合研究所にて作成

愛知県の 公立高校入試制度改革

期に比べて内申点重視にすることを義務づけるとともに、内申点の比率に下限(例えば3割以上)を設けることにします。こうすることで、中学校の学校運営や授業運営に影響を与えることなく、内申点に対する受験生や保護者の不公平感の軽減を図り、さらに高校側も入学者としてふさわしい生徒を選抜しやすくなると思います。

6 私案の問題点と課題 最大のポイントは「学校序列化の是非」

入試制度には「正解」というものではありません。いくつか実現させたい“目的”のうち何に重きを置くかの選択の結果出てくる「妥協物」にすぎません。ですから現在の複合選抜制度と同様に、どのような入試制度に変えたとしても必ず何らかの問題は出てきます。今回お示しした私案にも次に挙げる4つの問題点や課題があると考えています。

①学校の序列が明確化

1点目は、現在よりも学校の序列化が進むことです。今回の私案は国公立大学の入試制度に近いと書きましたが、大学受験ではあらゆる大学が予備校の行う模試の偏差値

で序列化されているように、県下全ての高校が業者テスト等によって序列が一層明確になると思います。難易度による高校の序列は現在でも存在し、私自身は序列化は避けられないことと思っていますが、序列化を悪いと考えるかどうかや、学校間の格差はできる限り小さくすべきかといったことは、人それぞれ判断の分かれるところでしょう。いずれにしても学校序列化の是非は入試制度のあり方に決定的な影響を与えるものですから、この点は入試制度改革の話に入る前にしっかり議論しておく必要があると思います。

②中学の進路指導への影響

2点目は、中学校での進路指導が難しくなることです。現在、中学校での進路指導は各校が独自に行う校内実力テストと内申点のデータをもとにして、卒業生の合格実績などを参考にしながら行われるのが一般的です。ところが、この私案のような入試を行いますと、特に内申点がほとんど考慮されない進学校の前期試験では内申点が合否の目安にならないため、かつての「中統テスト」^(注2)のような全県的な業者テストへのニーズが高まることになるでしょう。確かに前期試験に関しては業者テストの様な物差しが無いと出願校を決める

図表5 愛知県公立高校入試制度改革の「私案」

	現行制度	私案	狙い
一般入試の受験機会	・2回(Aグループ/Bグループ)	・2回(前期/後期) ・前期、後期の募集人員は各高校が9:1~1:9の範囲で自由に決定	・複数回の受験機会を望む生徒保護者への配慮。高校の特色付けの強化。全国トップクラスの進学校を作る
学区	・尾張学区と三河学区に2分	・全県を1学区に統合	・尾張と三河の「見えない壁」を崩す
群・グループ分け	・各学区を1群、2群に分け、さらに各群をAグループ、Bグループに2分。原則として同一群の異なるグループから受験校を1校ずつ選択(第2志望はなくても可)	・全席(前期後期同一校の受験も可)	・学校選択の幅を大きく広げて第2志望でも納得して進学できるようにする→志望意欲を持った生徒が集まることで高校の特色付けにつながる
当日点:内申点の比率	・当日点:内申点の比率 I型(原則)・・・100:90 II型(内申重視型)・・・100:135(内申点を1.5倍) III型(当日点重視型)・・・150:90(当日点を1.5倍) ----- ・全体に占める内申点のウエイト: I型47.4%(主に普通科中位と専門学科が選択) II型57.4%(主に普通科下位と専門学科が選択) III型37.5%(主に進学校上位の大半が選択)	・前期・・・各高校が自由に決定(10:0も0:10も可。副教科のみを評価したりSSHで理科や数学の評価を引き上げたりすることも可) ・後期・・・総得点に占める内申点のウエイトが3割を下回らない範囲で各高校が自由に決定 ・仮に内申点のウエイトを一定以上に保つならば千葉県のような学校間調整を行うことを検討	・中学校の学力レベルや学校毎の内申点の付け方(評点の甘辛)による不公平排除 ・内申点のウエイトを高校が自由に設定できるようにすることで高校の特色付けがしやすくなることと、高校が求める入学者を入学させやすくなる(例・極端に内申重視にすれば副教科を含めて万遍なく努力をして学校の指導に従う生徒を入れやすくなる)
推薦入試	・学力推薦、人物推薦、環境推薦の3種類	・人物推薦、環境推薦のみとし、学力推薦は廃止	・一般試験があれば学力推薦は意義が乏しい

出所:共立総合研究所にて作成

のに苦勞することになると思われます。ただ、業者テストについては現在中学校が直接関与しなくなりなりましたが、塾が行う模試の結果が(塾の)進路指導に使われていますので、決して業者テスト自体がなくなったわけではありません。また内申点が重視される後期試験については、内申点等による学校の進路指導は引き続き重要になります。仮に中学での進路指導に業者テスト的な物差しがどうしても必要ならば、埼玉、山梨、岩手などで行われている「校長会テスト」のような中学校自体が関与するテストの仕組みを作るというのも一つの方法でしょう。文部科学省は平成5年以降、中学校の進路指導における業者テストの廃止を指導していますが、それは受験生に「業者テストの点数で志望をあきらめさせない」のが大きな目的です。それならば前期試験は生徒自身の好きな学校をチャレンジさせ、後期試験では今まで通り学校の実力テストと内申点をもとに「安全な進路指導」をすれば、中学校の進路指導を業者テストに頼る必要ないと思います。

③前期不合格となった場合の心理的負担

3点目は、前期試験が不合格となった受験生や保護者に大きな心理的負担が生じることです。現行の複合選抜制度ではAB両グループの結果が一斉に発表されますので、背水の陣で2度目の試験に臨むということはありません。ただ、この問題は複数回の受験ができる県では当然起きていることです。また、どうしてもこのことが問題というのであれば、(入試の事務処理上対応が可能なら)前期と後期の受験校にあらかじめ第1志望、第2志望の順位をつけ、合格校を前期・後期同時に発表する方法も考えられるでしょう。

④中学校運営への影響

4点目は、当日点と内申点の比率を各高校が自由に決められるようになると、普通科を中心に当日点重視の高校が増え、その結果内申という縛りが効かなくなり、中学校の授業運営に影響が出る恐れがあることです。

ですが、私案では内申点のウエイトは各高校の自由裁量としていますので、日頃の授業態度や学習への取組姿勢を重視したい高校は、思い切って極端に内申点重視とするこ

とも可能です(現行制度でも難易度の低い高校は全体的に内申点が重視されています)。また、現在より当日点重視になると予想される進学校についても、後期を前期より内申点重視にしておけば、受験生が「内申を完全に捨てて」授業を聞かなくなるようなことは考えにくいでしょう。

最後に、この原稿を書いている時点では、今回の高校入試制度改革の議論は始まったばかりで、今後どのような方向に進むのか見当が付きません。もしかしたらこれが活字になる頃には、私がここでお示した私案とは全く違った案が議論されているかもしれません。今回はずいぶん長くなってしまいましたが、“現在進行形”である愛知県の公立高校入試制度改革について、“マイ・オピニオン”を述べさせていただきます。愛知県の子どもの「15の春」がより望ましい姿となるように、これからも教育懇談会での議論を続けてまいりたいと思います。

- (注1) 都市経済学者のリチャード・フロリダ(トロント大学)が名付けた社会階層。新しいアイデアや技術、コンテンツの創造によって「経済成長を担う人々」のことで、具体的には科学者、エンジニア、建築家、デザイナー、教育者、アーティスト、ミュージシャン、エンタテイナー、起業家、大企業の上級管理者や専門職などを指す。
- (注2) 大学区制の単独選抜制度の時代から、学校群制度、複合選抜制度の初期まで愛知県で行われていた全県的な業者テスト。試験実施にあたっては中学校が全面的に関与し、中学校での進路指導もこのテストの成績をもとに行われた。

えぐちしのぶ 江口 忍

PROFILE

1965年(昭和40年)名古屋市生まれ。1987年名古屋大学法学部卒。日本長期信用銀行にて約10年勤務後、1997年1月に設立間もない共立総合研究所に入社。現在までの15年間に約40本の調査レポートを執筆。2010年から副社長。2011年3月、名古屋駅前の「OKB Harmony Plaza 名駅」に名古屋オフィスを開設したのに伴い同オフィス代表に就任。名古屋人としての皮膚感覚とデータに基づくユニークな名古屋経済の分析で知られ、新聞・テレビへの登場機会も多い。

